

121

2018 SUMMER

美術館NEWS



「美術館の紹介」Vol. 21

屋内の階段は、一段一段が直角でなくゆるやかに傾斜する。床材に用いられた岡山産の万成石は凹凸が部分的に残され、滑り止めになるとともに触感の多様さをみせる。艶消しの黒花崗岩と白い天井によって展示物を引き立てている地下展示室とは対照的な装飾性だ。

岡山の洋画家とフランス近代絵画

橋村 直樹(学芸員)

この夏、岡山県立美術館で特別展「ポーラ美術館コレクション モネ、ルノワールからピカソまで」(2018年7月6日～8月26日)が開催されます。この展覧会は、ポーラ美術館の誇る西洋絵画コレクションの中から、クールベとマネにはじまり、モネやルノワール、セザンヌ、マティスやヴラマンク、さらにはピカソやブラックといった人気の高い巨匠たち20人の作品72点を展示し、個性豊かな作品群が織りなす豊潤なフランス近代絵画の魅力について紹介するものです。

写実主義から印象派、そしてポスト印象派からフォーヴィスム、キュビズムにまで至る19世紀後半から20世紀前半にかけての近代フランス前衛絵画の展開を辿ることのできる展覧会の開催にあわせ、このエッセイでは、そのような絵画と関わり影響を受けた岡山ゆかりの洋画家たちについて紹介したいと思います。

最初に取り上げるのは、1884(明治17)年にドイツのミュンヘンに留学した原田直次郎(1863-1899年)です。原田は現地の美術アカデミーや兄の豊吉と旧知だったアカデミー元教授のガブリエル・フォン・マックスのもとで西洋絵画の修業を行いました。留学時代の作品にはアカデミック絵画はなく、《靴屋の親爺》(東京藝術大学蔵)や《男性像》(図1)のような労働者や市井の老人を描くリアリズムの影響が感じられる人物画を残しています。それには当時のミュンヘン画

壇の画家たちやアカデミーの教師陣の中に、フランス写実主義の巨匠クールベから感化を受けてリアリズム的風俗画をよく描いていた画家たちがいたことが影響しているでしょう。また原田は、1886年11月にミュンヘンを去った後、イタリア経由でパリに向かい、翌年5月頃までの数か月を過ごしています。1887年2月には国立美術学校の入学の手続きを取っていて、ミュンヘンに続き、パリでも現地の美術教育を受けようとしていたと思われるのですが、実際は腰を据えて本格的に学ぶことはなく、同年6月には帰国しています。パリ滞在中、おそらく原田は美術館を巡って古典美術やアカデミック絵画を中心に見て学んだでしょうが、画廊などでは同時代の前衛絵画も実見していたと思われます。クールベのインパクトを受けた画家たちが周囲にいたミュンヘンで学び、留学前にミレーの《落ち穂拾い》のコンテによる模写も残している原田は、間接的にリアリズムの影響を受けているといえるでしょう。

次に紹介するのは満谷国四郎(1874-1936年)です。満谷は、1911(明治44)年から1913(大正2)年にかけての二度目の滞仏の際、大原孫三郎の要請によりカーニュにルノワールを訪ねて作品の制作を依頼しています。満谷は、フランス近代絵画の巨匠と実際に会っているだけでなく、この滞仏中に、褐色を基調とし、描く対象をリアルに再現する以前のア



図1: 原田直次郎《男性像》1886年 個人蔵 / 図2: 満谷国四郎《裸婦》1913年 当館蔵



図3: 正宗得三郎《婦人像(パリジェンヌ)》1914年 当館蔵 / 図4: 正宗得三郎《パリのアトリエ》1923年 当館蔵 / 図5: 坂田一男《キュビズム的人物像》1925年 当館蔵



カデミックな画風から、明るい色彩による平面的で装飾的なものへと自らのスタイルを大きく変化させました。例えば、《裸婦》(図2)では、背景の布やクッションの花柄、そして明るい色彩が画面に装飾性を与え、肌の明るさが目立ち、ボリューム感のない女性の裸体が平面的な印象を強めています。このような満谷の作風の変化に、印象派のルノワールやポスト印象派のセザンヌからの感化を見てとることができます。

続いて紹介する正宗得三郎(1883-1962年)は、近代フランス前衛絵画からの影響をもっとも受けている岡山ゆかりの洋画家の一人といえます。1914(大正3)年6月半ばにパリへとやって来た正宗は、以前より実見したいと願っていたマネやモネ、セザンヌやルノワール、マティスらの前衛絵画を見ることができたため、興奮冷めやらぬままモデルを雇うなどして旺盛に制作しました。その頃の作である《婦人像(パリジェンヌ)》(図3)では、女性の肌がピンクや乳白色の明るい色彩で、細かな筆捌きによって処理されており、留学以前より感化を受けていた印象派、とりわけルノワールの色彩や筆触の影響を見ることができます。1916年4月まで続いた第一次滞仏中、正宗はとりわけモネの作品を数多く見て模写もし、また帰国が近づいた時期にパリの画廊でマティスと偶然知り合っ、アトリエを訪問するようになりました。正宗は、マティスの制作の様子を見たり、芸術論を交わしたりして、彼から大きく感化を受けています。二度目の滞仏時の作品である《パリのアトリエ》(図4)では、横た

わる裸婦や床に敷かれた黄色のストライプ柄のあるオレンジ色のカーペットなどのモチーフ、画面を支配する明るい色彩にマティスの影響が認められます。

最後に紹介するのは坂田一男(1889-1956年)です。1920年代から30年代にかけてパリに留学した坂田は、当時、他の多くの日本人画家が影響を受けていた印象派やポスト印象派、あるいはフォーヴィスムなどには目もくれず、アカデミー・モデルヌのキュビズムの画家フェルナン・レジェに師事しました。当時、すでにピカソとブラックによるキュビズムは終焉を迎えていて、彼らの追従者であったレジェもキュビズムから脱却していましたが、坂田は、三次元の描写対象の形をバラバラに分解して二次元の画面上に再構成するという、この美術の革新運動に正面から取り組みました。《キュビズム的人物像》(図5)を見ると、坂田がキュビズムの本質を理論的に理解していたことがわかります。

近代フランス前衛絵画と関わって間接的あるいは直接的に影響を受けたり、作風を変化させたりした岡山ゆかりの洋画家たちは、児島虎次郎や中山巍など他にもいますが、ここでは紙幅の都合上、上記の4人を取り上げました。岡山ゆかりの洋画家たちも様々に影響を受けた、リアリズムから印象派、そしてポスト印象派からフォーヴィスム、キュビズムへと展開するフランス近代絵画の魅力を堪能できる特別展「ポーラ美術館コレクション モネ、ルノワールからピカソまで」にぜひご期待ください。

廬山の真面目

古川 文子(学芸員)

皆さんは「廬山」という名の山をご存知でしょうか？

中国の江西省北部・九江市に、長さ25km、幅10kmにわたって広がる山岳です。中国最大の淡水湖である鄱陽湖の北に位置し、標高1474mの漢陽峰を最高峰に多数の峰々が連なる景勝地です。古来、儒教・仏教・道教の聖地として信仰され、陶淵明や李白の詩に詠われるなど、文化的にも豊かな背景をもち、ユネスコの世界文化遺産に登録されています。廬山の西麓にある東林寺の僧・慧遠が陶淵明と陸修静を見送る際、会話に夢中になり虎溪を渡ってしまった故事を描いた「虎溪三笑」や李白の詩「望廬山瀑布」に由来する「李白観瀑」などの画題は、中国から日本に伝わり長く親しまれてきました。

岡山県立美術館には、中国の画僧・玉澗が描いた水墨山水画の名品《廬山図》(重要文化財／13世紀)が収蔵されています。雪舟が、玉澗の作品から潑墨(画面にそそいだ墨の形に連想を重ね、景物を描き出す手法)を学び、同じく当館蔵の「山水図(倣玉澗)」(重要文化財／15世紀)等の制作に取り入れていることから重要な作品です。(前号に図版掲載「開館30周年を迎えて」文:守安館長)さらに、廬山の位置する江西省と岡山県とは、日中国交正常化に尽力した岡崎嘉平太氏(1897-1989、岡山県出身の実業家)の紹介により1992年に友好提携を結び、25年余も交流が続いています。

このたび当館では、その廬山に着目し、新たな角度から山水画の魅力をご紹介する特別展の準備を進めています。1958年岡山県生まれの画家・山部泰司氏は、1980年代に関西ニューウェーブと呼ばれた多様な芸術活動を経て、有機的な赤色や深い青色など単色を用いた大画面の風景表現を中心に絵画の可能性を追求しています。近年、(伝)董源《寒林重汀図》(重要文化財／黒川古文化研究所蔵)との出会いにより、F200号2枚組(259×388cm)の《横断流水図》(2014年)を制作し、水や大気の躍動を感じさせる絵画にさらなる展開を示しました。昨年5月には、古典の名品に通じる迫力に満ちた作風が評価され、第30回「京都美術文化賞」を受賞しています。



左:(伝)董源《寒林重汀図》(原本五代 10世紀) 黒川古文化研究所蔵
右:山部泰司《横断流水図》(2014年) 作家蔵



ロープウェーより開先瀑布を望む

2016年夏、山部氏の廬山への取材旅行に同行しました。写真は、ロープウェーから廬山の南麓の開先瀑布を撮影したものです。実際に歩いてみる廬山は、絵画や写真で想像するよりスケールが大きく、峰の形も変化に富んでいました。

タイトルの言葉は、蘇軾の詩「題西林壁(西林の壁に題す)」より

横看成嶺側成峰	横より看れば嶺を成し	側よりすれば峰を成す
遠近高低各不同	遠近高低	各々同じからず
不識廬山真面目	廬山の真面目を識らざるは	
只縁身在此山中	只だ身の此の山中に在るに縁る	

「真面目=しんめんもく」と読みます。見る角度によって、さまざまに変化する廬山の景観の多様性を表わすだけでなく、物事の中に身を置いていると本来の姿を知ることができないという哲学的な要素を含んだ詩です。私たちが普段、今いる場所、生きている時代の感覚で、物事を見たり考えたりしています。視点や意識を変えることで、もっと大きな世界を知ることができるのかも知れません。

この秋の特別展では、遠い憧れの地をして描かれた廬山、実際に廬山を訪れた画家により描かれた作品、心の中に思い浮かべ再構成した作品など、多様な視点で描かれた廬山の姿をご覧ください。会期中には、出品作家とゲストによる会場でのトーク、岡山大学大学院の協力による記念シンポジウム、廬山を舞台にした文学や映画について語り合う講座や、廬山特産の銘茶を味わう会など、多彩な催しも企画中です。この機会にぜひ、時を越えて生き続ける廬山の魅力を体感してみてください。

【特別展】「生きてゐる山水 ―廬山をのぞむ古今のまなざし―」(会期:2018年8月31日- 9月30日)

浦上玉堂《六書通序》と浦上春琴《八居詩卷》

八田 真理子(学芸員)

ここ岡山県立美術館の建つ天神町に生まれ、江戸時代後期に生きた文人画家の浦上玉堂(1745-1820)とその長男・春琴(1779-1846)の書が、次男・秋琴の血脈につらなる龍川裕氏からの寄贈を受けて近年当館の所蔵品となった。この二点は、彼らが中国文化にどのように触れ、楽しんだのかを教えてくれる。

《六書通序》(図1)で玉堂が書しているのは、康熙59(1720)年の畢弘述による篆字字典『六書通』序文である。『六書通』は、多色刷りの書籍出版で名を馳せた明末の閩齊級の撰によるもので、これを重訂して世に広めたのが清初の畢弘述である。日本でも明和9(1772)年には出版されていることが確認できる。

玉堂が50歳での脱藩前からすでに篆隷を熱心に研究していたことは作品から窺えるため、『六書通』の入手も比較的早い時期かもしれない。頼山陽(1781-1832)が文化14(1817)年に彫刻家の小島彤山に対し、『六書通』を拝借したい旨を記した書簡を送っているほか^{*1}、青木木米(1767-1833)旧蔵本の存在^{*2}などから、玉堂の息子世代の友人らは親しんでいた書であったことがわかる。玉堂書の「古怪絶俗」(田能村竹田『山中人饒舌』)の境地は『六書通』のような字典を参照し、研鑽を積んだ結果に達成されたものであろう。玉堂の学びの跡を伝える資料である。

《八居詩卷》(図2)は春琴の書を卷子装にしたもので、「交翠書窓」、「松竹深處」をはじめとする全8題について七

言絶句を作詩している。そもそも「八居詩」とは、山居や岩居など八つの場所について固定の韻脚を用いて詠む詩のことで、17世紀に福建省の魏憲が創始した。日本でも新井白石(1657-1725)がこの八居詩を友人らと詠み交わしている^{*3}。

ここで春琴は、白石らの詠んだ「八居」とは異なる題に詩を詠んでいる。跋によれば、紀州(和歌山県)の樸庵田君なる人物がこの題を送ってきたという^{*4}。秋から冬にかけても作詩が終わらなかったと述懐しつつも、少しく体調を崩して外出を控えていた折に完成させたらしい。また、未だ紀州に行ったことがなく題に適さないものがあるから、いつか必ず行こうとも述べる。別の資料によれば、その後の天保14(1843)年に春琴は実際にこの樸庵田君のもとを訪れ、約束を果たしている^{*5}。書かれた年代は不明ながら、天保12(1841)年の再識が付される。春琴の、漢学に親しい人物らとの広い交友がしのばれる資料である。詩自体は古典が引用されつつ、豊かな色彩を添えた情緒溢れる描写が印象的で、この詩をもとにした画の存在も想像してみたくなる。

※1 徳富蘇峰『頼山陽書翰集』(上巻)283頁、民友社(東京)、1927年

※2 その後富岡鉄斎のもとを経ている。『富岡文庫御蔵書入札目録』38番、ヨハネ堂(大阪)、1939年

※3 『八居題詠』奎文館(京都)、享保6(1721)年

※4 箱書によれば、樸庵田君はすなわち和歌山藩士の田口樸庵であるという。

※5 千葉市美術館の松尾知子氏にご教示頂いた。



1. 浦上玉堂《六書通序》江戸時代後期(18世紀)



2. 浦上春琴《八居詩卷》天保12(1841)年

展覧会スケジュール

6月
March

4月20日|金—7月1日|日|

【特別展】
岡山県立美術館開館30周年記念展
県美コネクション
つながる「ひと」・「もの」・「こと」

昭和63(1988)年開館した当館は、今年開館30年の節目を迎えます。本展では、当館の活動の柱である岡山【ゆかり=つながり=コネクト】をキーワードに、当館がこれまで培ってきた「ひと・もの・こと」を作品とさまざまな関連事業でご紹介します。“岡山ゆかり”であることがいかに豊かな文化を内包するものであるか改めてお気づきいただけることでしょう。

各展覧会期間中、当館学芸員による
ギャラリートークや美術館講座など
詳しくは当館HPまで。
www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

7月
April

7月6日|金—8月26日|日|

【特別展】
ポーラ美術館コレクション
モネ、ルノワールからピカソまで

2002年、箱根に開館したポーラ美術館は、国内屈指の充実した西洋絵画コレクションを誇ることで知られています。本展では、そのコレクションの中から、特に人気の高い印象派を代表するモネ、ルノワールをはじめ、ポスト印象派のセザンヌやゴーガン、フォーヴィスム(野獣派)のマティス、さらにはキュビズムのピカソといった巨匠たちによる作品72点をご紹介します。個性豊かな作品群が織りなす豊潤なフランス近代絵画の魅力に迫ります。

7月7日|土| 14:00~15:30

**記念講演会 「1910年代フランス：
モネやピカソが生きた
激動の時代」**

講師 木島俊介氏(本展監修者・ポーラ美術館館長)
会場 2階ホール(当日先着・210名)

8月
May

8月31日|金—9月30日|日|

【特別展】
生きてゐる山水
廬山をのぞむ古今のまなざし

玉潤《廬山図》(重要文化財)は、当館のコレクションを代表する水墨の名品です。また、廬山の位置する江西省と岡山県は、1992年に友好提携を結び交流が続いています。本展では、陶淵明や李白の名詩、「虎溪三笑」の故事でも名高い廬山に着目し、中国の宋・元時代から日本の近世にかけての名品に現代作家・山部泰司(1958年 岡山県生まれ)による新たな風景表現の視点を加え、時を越えて生き続ける「山水画」の真髄を探ります。

7月28日|土| 14:00~15:00

**記念演奏会 「フランス印象派と
印象主義的音楽の調べ」**

演奏 岡山フィルハーモニック管弦楽団
メンバーによる弦楽四重奏
会場 2階ホール(当日210名) ※13:30~整理券配布

9月
June

9月5日|水—9月16日|日|

第69回 岡山県美術展覧会

9月26日|水—11月4日|日|

【岡山の美術展】
大久保英治展
日常の歩行—伽耶六国から吉備へ—

9月1日|土|

シンポジウム 「記念シンポジウム」
パネリスト 遊佐徹氏、佐々木守俊氏、
橘英範氏(以上 岡山大学)、
竹浪遠氏(京都市立芸術大学)、
守安収(当館館長)ほか
会場 2階ホール(当日先着・210名)

30周年記念展から思うこと

守安 収

開館30周年記念展『県美コネクション』が無事オープンしました。30年前の開館展『岡山の絵画500年』を手掛けた折の不安や高揚はどこへ行ったことや、落ち着いてスタートできました。展示は収蔵品を中心とした内容ですし、準備は万端。何より使い慣れた施設・設備ですから、不安の入り込む余地などなく、やはり経験を積んだことが大きいようです。しかし、展覧会にかかる意気込みが薄れたわけではありません。学芸員各人がそれぞれテーマと作品とを選択して展示室を分け合い、コーナーごとに完結を図ったことから気持ちのこもった展示の連続となりました。そこで、来館者からは「盛り過ぎ」「まじめで疲れた」といった声も寄せられた次第。美術館なのだからもっと余裕をもって楽しんで鑑賞できるように心配りしては、というご意見には共感するところが大きですが、今回に限っては致し方ないと思っています。30年分のコレクションの蓄積を実感していただくことが本展の一番の狙いであり、これまでコレクションの形成にご尽力くださった県民や各地・各界の方々に対してほんの少しだけでも返礼が叶ったらと企画した展覧会だったからです。▼「竹喬さんも遥邨さんも出ていないの？」という問い合わせには、5月30日からの後期にお出かけ下さいと返事をしました。前期と後期とでテーマが変わり、それに伴って作品もおよそ80%が入れ替わります。「岡山の美術」の豊かさと広がりを堪能していただけたら幸いです。あわせて、これからの展覧会では、臨機応変に切り口を変えながら当館を楽しんでいただけるよう心掛けたいと考えています。どうぞよろしく。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
www.okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

三井麻央

開館30周年記念展「県美コネクション」も会期後半になりました。それと並行して学芸員は、今回ご紹介したポラ美術館展や山水展など、次の展覧会の準備にも動んでいます。展覧会準備のみならず、作品紹介のページでご紹介したような館蔵品の管理や調査を持続的におこない、作品を守り続けることも美術館の重要な仕事。館ニュースは、美術館で「今」学芸員たちがおこなっている、さまざまな活動の記録でもあるように思います。なお、日々のイベントや現在展示されている作品の「今」については、SNS (Facebook、Twitter、Instagram)でもご紹介していますのでぜひご覧ください。